保津川（ホウヅ）　京都府にある大堰川上流の稱。

夏目漱石　名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。

嵯峨　京都府葛野郡。

亀岡　京都府南桑田郡。

四　保津川下り

夏目漱石

浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より二條に引返す。引返さぬは、山を貫いて丹波に拔ける。二人は丹波行の切符を買つて、亀岡に降りた。保津川の急湍は此の驛より下る捉である。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて、碧油の趣をなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生える。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。

「妙な舟だな。」と、宗近君が云ふ。底は一枚板の平かに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を轉がして、二人はよき程の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら、大丈夫どす。波はかゝりまへん。」と船頭が云ふ。船頭の數は四人である。眞先なるは、二間の竹竿、續く二人は右側に櫂、左に立つは同じく竿である。

ぎい〳〵と櫂が鳴る。荒削りに平げたる樫の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむんづと握る便りである。握る手の節の隆きは、眞黑きは、松の小枝に青筋を立てて、うんと搔く力の脈を通はせた樣に見

える。藤蔓に頸根を抑へられた櫂が、搔く毎に撓りてもする事か、強き項を眞直に立てた儘、藤蔓と擦れ、舷と擦れる。櫂は一搔毎にぎい〳〵と鳴る。

舟は二三度うねりを打つて、音なき水を、停る暇なきに、前へ〳〵と送る。重る水の蹙つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀨は是からである。

「愈、來たぜ。」と、宗近君は船頭の體を透かして、岩と岩の逼る間を半町の向に見る。水はどうと鳴る。

「成程。」と、甲野さんが舷から首を出した時、船ははや瀨の中に滑り込んだ。右側の二人はすはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳に立つは竿を横たへた儘である。傾いて矢の如く下る船は、どゝゝと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壞れるなと氣が附いた時は、もう走る瀨を脫け出してゐた。

「あれだ。」と、宗近君が指さす後を見ると、白い泡が一町ばかり逆落しに嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を萬顆の珠と我勝ちに奪ひ合つてゐる。

「壯なものだ。」と、宗近君は大に御意に入つた。

「夢窓國師とどつちがいゝ。」

「夢窓國師より此方の方がえらい樣だ。」

夢窓國師　疎石と稱す。禪宗の高僧。（一九三六―二〇一一）

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の落ちんとして落ちざるを苦にせぬ樣に、櫂を動かし來り、棹を操り去る。通る瀨は樣々に廻る。廻る毎に新なる山は當面に躍り出す。石山・松山・雜木山と數ふる遑を行客に許さゞる疾き流は、船を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな圓い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に擊附けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、綠崩るゝ眞中に舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途に此の大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向は見えず。削られて坂と落つる川底の深さは幾段か。乘る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突當つて碎けるか。捲込まれて見えぬ彼方に、どつと落ちて行くか。――舟は只まともに進む。

「當るぜ。」と、宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩ははやくも船頭の黑い頭を壓して突つ立つた。船頭は「うん。」と舳に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢に、波を呑む岩の太腹に潛り込む。横たへた竿は取直されて、肩より高く兩の手が揚ると共に、舟はぐうと廻つた。此の獸めと突離す竿の先から、岩

の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向へ落出した。

「どうしても夢窓國師より上等だ。」と、宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落盡くすと、向から空舟が上つてくる。竿も使はねば、櫂は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳を收めて、肩から斜に目暗縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根限り戻り舟を牽いて來る。水行く外に、尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に飛び、岩に這うて、穿く草鞋の滅り込む迄腰を前に折るだらりと下げた兩の手は、塞かれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかりである。うんと踏ん張る幾世の金剛力に、岩は自然と擦滅つて、引懸けて行く足の裏を、安々と受ける段々もある。長い竹を此處彼處と岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆らはぬ程に疾く滑らすための策と云ふ。

「少しは穩かになつたね。」と、甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鉈の音が丁丁とする。黑い影は空高く動く。

「丸で猿だ。」と、宗近君は咽喉佛を突出して峰を見上げた。

「慣れると何でもするもんだね。」と、相手も手を翳して見る。

「あれで一日働いて幾らになるんだらう。」

「幾らになるかな。」

「下から聞いて見ようか。」

「此の流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべつに駛つてゐる。所々にかう云ふ場所がないと、やはりいかんね。」

「おれは、もつと駛りたいぞ。どうも、さつきの岩の腹を突いて曲つた時なんか、實に愉快だつた。願はくは船頭の棹を借りて、おれが船を廻したかつた。」

「君が廻せば今頃は御互に成佛してゐる時分だ。」

「なに愉快だ。京人形を見てゐるより愉快ぢやないか。」

「自然は皆第一義で活動してゐるからな。」

「すると自然は人間の御手本だね。」

「なに、人間が自然の御手本さ。」

「それぢや、やつぱり京人形黨だね。」

「京人形はいゝよ、あれは自然に近い。ある意味に於て第一義だ。困るのは……」

「困るのは何だ。」

「大抵困るぢやないか。」と、甲野さんは打遣つた。

「さう困つた日にや、方が附かない。御手本が無くなる譯だ。」

「瀬を下つて愉快だと云ふのは、御手本があるからさ。」

「おれにかい。」

「さうさ。」

「すると、おれは第一義の人物だね。」

「瀬を下つてゐるうちは、第一義さ。」

「下つて仕舞へば凡人か。おや〳〵。」

「自然が人間を飜譯する前に、人間が自然を飜譯するから、御手本はやつぱり人間にあるのさ。瀨を下つて壯快なのは君の腹にある壯快が第一義に活動して、自然に乘移るのだよ。それが第一義の飜譯で、第一義の解釋だ。」

「肝膽相照らすと云ふのは御互に第一義が活動するからだらう。」

「まづそんなものに違ひない。」

「君に肝膽相照らす場合があるかい。」

甲野さんは默然として、舟の底を見詰めた。言ふものは知らずと、昔老子が說いた事がある。

「はゝゝ、僕は保津川と肝膽相照らした譯だ。愉快々々。」と、

老子　周の賢人。道家の祖。

宗近君は二たび三たび手を敲く。

亂れ起る岩石を左右に縈る流は、抱くが如く、そと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて、巖角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」と、長い棹を舷のうちへ挿込んだ船頭が云ふ。鳴る櫂に送られて、深い淵を滑る樣に脫け出すと、左右の岩が自ら開いて、舟は大悲閣の下に着いた。

（虞美人草）

上田敏　文學博士。大正五年歿、年四十四。